

反戦を詠んだ歌人 与謝野晶子

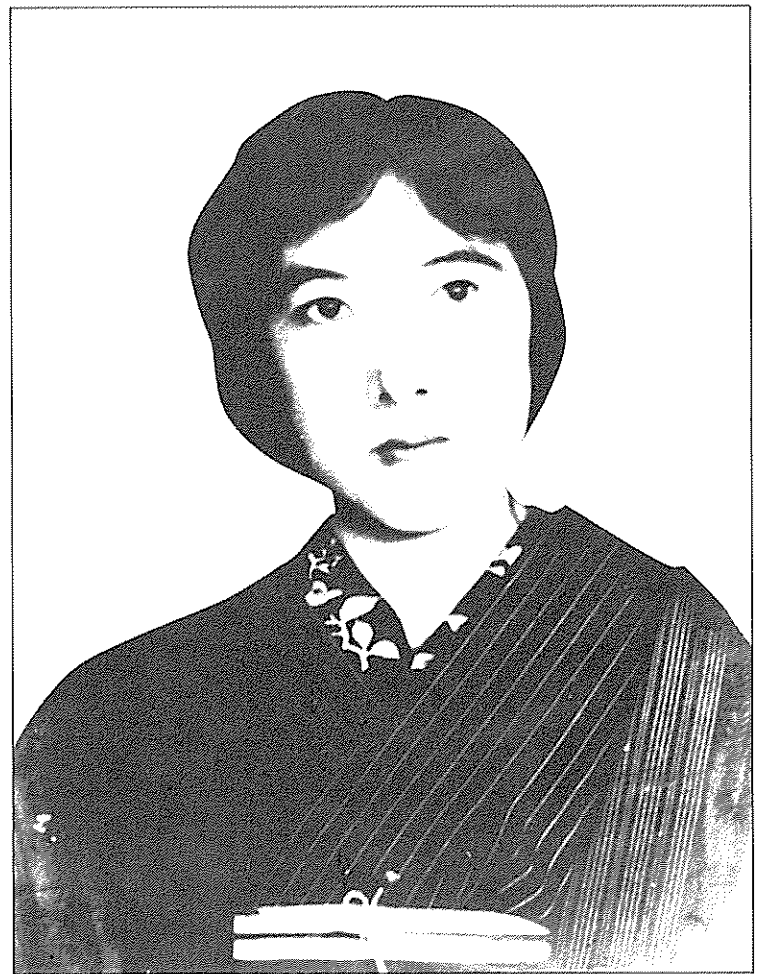
あ、をとうとよ 君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生れし君なれば
親のなきはまきりしも
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや
堺の街のあきびとの
老舗をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば
君死にたまふことなかれ
旅順の城はほろぶとも
ほろびずとも 何事ぞ

かたみに人の血を流し
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこころの深ければ
もとよりいかで思されむ

君は知らじな あきびとの
家のおきてに無かりけり
君死にたまふことなかれ
すめらみことは戦ひに
おほみづからは出でまさね

あ、をとうとよ 戦ひに
君死にたまふことなかれ
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたたまへる母ぎみは
なげきの中に いたましく
わが子を召され 家を守り
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる

暖簾のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を
君わするるや 思へるや
十月も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ
この世ひとりの君ならで
あ、また誰をたのむべき
君死にたまふことなかれ



与謝野晶子（よさのあきこ）1878～1942 旧姓、
麻呂。堺市の菓子商の三女。堺女学校卒業。「明
星」創刊とともに社友となり、翌年上京して師の鉄
幹と結婚した。歌集「みだれ髪」は国中を席卷し、
「明星」黄金期の頂点に立った。「恋ごろも」に取
められた長詩「君死にたまふことなかれ」は大きな反
響をよんだ。写真は文化学院（東京）提供

明治三十七年二月 日露戦争は起った。晶子は出征した弟の誨三郎（宗七）の身を案じて作ったのがこの「君死にたまふことなかれ」の不滅の絶唱となった。この詩が明星九月号に発表されるや俄然反響を呼び晶子は、批判の嵐の中に立たされることになった。

大町桂月は「太陽」の誌上で「義勇公に報すべきのたまへる教育勸諭 としては宣戦の詔勅を非難す 大胆なるわざなり」とまできめつけた。世の中が日露戦争にわき立っているさ中のこととてこれに同調するものも多く、晶子の家へ投石などするものもあつたと聞く。

しかし、この桂月に向って晶子は「ひらきふみ」という手紙体の論文でもって毅然として真意を述べ、心ない同調者にも併せて答えた。

「わたくし風情のままに作り候物にまでお眼を通し下さるるを知りて忝きよりもまずは顔があかくなる勿体なきことに存じ候」といつてから、徐々に述べはじめる。「あれは歌に候 この国に生れ候私はこの国を愛て候こと誰にか劣り候べき（中略）私が君死にたまふことなかれと歌ひ候こと桂月様太相危険なる思想と仰せられ候へど当節のやうに死ぬま死ねよと申し候ことまたなにことにも忠君愛国などの文字や畏おほき教育勸諭などを引きて論ずることの流行はこの方却つて危険と申すものに候はずや 私のすきな王朝の書き物にも人を死ぬと申すことも畏おほく勿体なきことかまはず書きちらしたる文章も見当らぬやうに心得候 いくさのこと多く書きたる源平時代の御本にもさやうのことはあるまじく いかがや」

世が世だけに思つても公言出来ない人は少くなかつたのであろう。二十代の女性であつた晶子は当時の一流の学者先生を向こうにまわして痛快な公言をしたのである。

「歌は歌に候 歌よみならひ候からには私どうぞ後の人に笑われぬ まことの心を歌ひおきたく候まことの心うたはぬ歌に何のぬちか候べき」 うたよみがまことの心をうたわぬ歌に何の価値があるかと言われてみれば、それこそ正論である。

新橋・渋谷などの汽車の駅へ軍隊の出発の日に一時間立ってご覧なさい。そしてそこに来ている兵士の家族などの姿を見なさいとも言っている。

「無事で帰れ 気をつけよ 万歳」と申し候はやがて私のつたなき歌の君死にたまふことなかれと申すことにて候わすや 彼れもまことの声 これもまことの声 私はまことの心をまことの声に出だし候より外に歌のよみかた心得ず候」

晶子の大事は身をもって、まことの歌を守ることであつた。

（『櫻が生んだ稀有な歌人と謝野晶子』 昭和57年 阪口千壽著から 一部略）